ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌 2026

Take free!

なび

2月号
vol. 228

「2月10日はフルートの日」
写真：ヒューマンバンド

特集

障老病生の物語（しょうろうびょうしょう）

at / from nishinari

西成で／から…➡13♥

第8回 特養内葬儀をされた８０代のある女性の物語

障老病生の物語

しょうろうびょうしょう

at / from nishinari

西成で／から…➡13♥

第8回
特養内葬儀をされた80代のある女性の物語

「障老病生（しょうろうびょうしょう）」とは、仏教の「生老病死」をもじって、「障害を持つこと」「老いること」「病気になること」「人と違った人生を生きること」を意味する造語です。
本人もその周りの人たちも、とまどいや不安など、いろんな気持ちを抱きながら、一人ひとりの物語を紡いでいます。その物語に寄り添いながら、「福祉って?」「幸せって?」「地域って?」など、みなさんと一緒に考えていければと思います。

はじめに

「障老病生の物語」、第8回目の今回は、特養内葬儀をされたある女性の物語です。

特養内葬儀とは、特別養護老人ホームの施設内にある多目的ホールや地域交流スペースなどを活用して行うお葬式で、最近増加しているようです。私たちもご本人やご遺族などのご要望に基づき、いち早く2012年にはじめて特養内葬儀を行い、以後、20件以上の葬儀に携わってきました。

今回ご紹介するのは、2020年に地域密着型特養の施設内でお葬式をされたある女性の物語です。人生の最期がいつ来るのかは誰にも解りません。しかし、すべての人に必ず最期が訪れます。この方との関わりを通じて私たちが感じ、考えたことについて、読者の皆さんと共有させていただきたいと思います。

こだわりと孤独の中で…毛糸がつないだ笑顔

「身寄りのない女性なのですが、施設入所を希望されています。受け入れていただけませんでしょうか?」

今から7年前の夏、ある区の福祉事務所からの電話がきっかけでした。

すぐに特養の相談員がご自宅の団地を訪問したところ、ベッドの上で用を足すのが当たり前になっていたようで、尿臭が強く、畳も糞尿で腐っており、部屋中に三色団子やコカ・コーラのボトルが散らかっています。

ご本人は「交通事故に遭って一度死んで生き返った。でも頭を強く打ったからもうだめ」「早く死にたい」が口癖で、「靴下は黒じゃないとだめ」「薬はこんにゃくゼリーとコーラじゃないと飲めない」など色々なこだわりを持っていました。

「これは結構難しいかも…」と相談員も頭を抱えていましたが、ご本人は「施設に入りたいから早く連れてって」とのこと。引っ越しや入所は案外スムーズにできました。

とはいえ、入所当時は、荷物はダニだらけだったので、居室のテラスで虫干しすること3か月。特に、大量の毛糸が宝物とのことで、ダニ退治が終わったら、宝物の毛糸で編み物をされるようになりました。その編み物を通じて、「とにかくほめる」というスタッフとのコミュニケーションが芽生え、笑顔も見せていただけるようになりました。その中で、もともとは九州にある大きな酒屋さんのお嬢様で、お手伝いさんがいっぱいいて、観光バスもあり、自分は教師をしていたとの話も教えてくれるように…。

慣れ親しんだ場所で…遺品整理が紡いだ縁

入所前とは打って変わって穏やかな生活を過ごされていましたが、入所から約2年後、持病の心臓の状態が悪化してしまいます。ご本人は、病院ではなく、いつもの人に囲まれて慣れているここ（特養）で死にたいとのこと。スタッフもその気持ちに寄り添いながら、だんだんベッドから起きることが難しくなってきたある日、朝ごはんをふた口召し上がった後に亡くなられました。

葬儀は、生前のご希望に沿って、施設内で行いました。多目的ホールにご遺体を移し、生前ご本人が好きだった食べ物や洋服、小物などをお供えし、壁にはスタッフが作った装飾を飾り、入所されてからの写真なども壁に貼り、近所のお寺からお坊さんを読んでスタッフ総出でお見送りをしました（費

用はご本人の貯金で賄いました）。

その後、遺骨を葬儀屋さんに預かってもらっている間に遺品整理をしていると、だいぶ昔に北海道から届いた年賀状を発見。ダメもとで連絡を取ってみると、ずっとご本人を探していたという親戚の方と連絡が取れました。そこからあれよあれよという間に実家のある九州のお墓も見つかり、何とかそのお墓に入ることができました。連絡がついたときは、スタッフみんな本当に大喜びでした。

その人らしい死に寄り添う…QOLとQOD

特養内でのお葬式が増えているのはなぜでしょうか？

それは病院ではなく、特養などの施設でお亡くなりになる方が増えているからです。全国老人福祉施設協会（老施協）の「全国老人ホーム基礎調査」によれば、特養に入所された方のうち、２００２年には病院死が41・６％でしたが、２０１２年には31・８％まで減少し、一方で施設死は30・７％から43・２％へと増加しています。

この傾向の要因としては、次の２つが考えられます。

一つは、２００５年以降に特養で広まったユニット型個室です。従来は４人部屋などの多床室が主流でしたが、個室ではプライバシーが保たれ、入居者それぞれの生活スタイルを維持できるようになってきています。これにより、慣れている特養で最期を迎えたい、というニーズが高まったと思われます。

もう一つは、２００６年に設けられた介護保険の看取り介護加算です。これにより、施設には提供した看取りサービスに応じて加算収入が発生し、施設内での看取りが促進されたと思われます。

私たちが特養をはじめたのは１９９９年です。当時は「終の棲家」にはしたくないとの思いから、在宅復帰をめざす特養というコンセプトで、当初１０２床のうちの４分の１の25床をショートステイとして出発しました。創設当初のコンセプトは今も変わりませんが、ニーズの変化に伴い、感染症対策などを目的とした全室個室化を行ったり、特養内葬儀など、エンディングサポートの取り組みを進めたりしています。

福祉の世界では、よくＱＯＬ（＝Quality of Life、生活の質・人生の質）という言葉が用いられますが、併せてＱＯＤ（＝Quality of Death、良い死）という考え方もあります。私たちも「死」については考えることを先送りしがちですが、自分自身の死生観や価値観をつくりつつ、特養の入居者一人ひとりのその人らしい死や生き方に寄り添っていけるよう試行錯誤を積み重ねていきたいと思います。

なお、毎年西成区北西部では地域慰霊祭が開催されており、直近２０２５年までの間に累計で７２３名（ご利用者・関係者など）の方々の慰霊をさせていただきました。

おわりに

いかがでしたでしょうか？

医療等の発展につれて、「人生１００年時代」といわれるようになってきていますが、多くの人にとって死はいまだ不安や恐怖の対象かもしれません。

スティーブ・ジョブズは「死は最高の発明だ」と言いました。新しい者に道をゆずるためにあるのだと。このような発想から考えると、多くの人にとって死は恐れるものではなく、むしろ、生の帰結すべきゴールに変わるかもしれません。そして、自分がどのような形でゴールし、次の走者にバトンを渡すのか、を明確に意識できるようになるかもしれません。

どれだけ長生きしたのかだけでなく、どれだけ希望がかなえられたかで、特養の優劣が語られるように。特養内葬儀はそのような試みの第一歩かもしれません。

これからも、地域の中で少しずつ信頼を培い、様々な困難を抱える人たちの「居場所と出番づくり」を試行錯誤しながら続けていきたいと思います。何かお困りごとがありましたらお気軽にお問い合わせください。特養のご見学も３６５日いつでも受け付けています！

それでは、今回の物語にお付き合いいただきありがとうございました。次回の障老病生の物語にもお付き合いいただければありがたいです。

文責：(社福)ヒューマンライツ福祉協会
法人本部・障害者支援部 部長 屋代直信

※個人情報保護等の観点から、一部事実を改変して掲載しています。
※本記事のロゴや文字は、編集部にお願いして、ローヴィジョンの方や色覚障害の方にも読みやすいユニバーサルデザインにしてもらっています。

ヒューマンライツ福祉協会
LINE 公式アカウント

更生の道のりで見つけた新しい「表現」のカタチを
よりそいネットおおさかが紹介します。

あんたのセンスにあっぱれ！

第8回 表現と人が出会う場所で

これまで2ヵ月に一度、よりそいネットおおさかが関わるアートの取り組みの中で出会った様々な表現を紹介してきました。作品の完成度や上手さではなく、描くこと、つくること、その時間に流れる思いや、過程にある葛藤や小さな喜びに目を向けながら綴ってきたこのコーナーも、今回が最終回となります。

よりそいネットおおさかは、「被害者も加害者も生まないまちづくり」を目指し、刑務所等の矯正施設を退所した人たちの支援や、支援者との関係づくりを続けてきました。住まいや仕事、人との関係など、日々の生活にはさまざまな困難があります。その一つひとつに向き合いながら更生の道のりを支えるなかで、アートは支援の手段というよりも、その人らしさが静かに表れる時間として、私たちの活動のそばにありました。

11月15日には、昨年に続き「共に生きる障がい者フェスティバル」が開催され、よりそいネットおおさかも小さな展示として参加しました。会場には、以前にも出展してくださったアーティストの新作も並びました。前回よりも表現が深まったように感じられる作品や、継続して制作に取り組むこと自体を楽しみにしている様子が伝わってくる作品もありました。初めて自分の作品が展示されている様子を見に来たアーティスト本人の姿もあり、自身の作品の前で足を止めた来場者と自然に言葉を交わし、制作のことを語る姿はとても生き生きとしていて、その時間は小さく夢が叶った瞬間だったのかもしれません。

これまで活動を続ける中で、初めて作品を展示した人の緊張した表情や、回を重ねるごとに制作を楽しみにしている様子、学生や来場者と作品を介して言葉を交わす姿など、支援の中では見ることのなかった、さまざまな場面に立ち会ってきました。そこには「支援される人」「支援する人」という関係だけでは表せない時間があり、ただ同じ場にいて、同じ作品を見るという、何気ないやりとりが積み重なっていました。

このコーナーは一区切りとなりますが、こうした光景はこれからも続いていくはずです。よりそいネットおおさかは、これからも人と人が出会う時間を大切にしながら、アーティストたちの創作活動を応援していきたいと考えています。

また、本コーナーの掲載にあたっては、コーナータイトル「あんたのセンスにあっぱれ」にちなんだロゴも制作していただきました。言葉遊びのような小さな工夫にも、このコーナーらしさが込められていました。こうしたかたちでこの連載を支えてくださった編集部の皆さま、制作に関わってくださった方々、そして取材や掲載にご協力いただいたアーティストや関係者の皆さまに、心より感謝いたします。皆さんと一緒に、このコーナーを育ててこられたことをうれしく思います。

一般社団法人よりそいネットおおさか

〒542-0012 大阪市中央区谷町7丁目4-15
大阪府社会福祉会館2階
TEL/FAX：06-6711-0130
HP：https://www.yorisoi-osaka.jp

よりそいネットおおさかは、刑務所等の矯正施設を退所した人たちの支援や、支援者との関係づくりに取り組み、ネットワーク型の福祉構築を目指した活動を行っています。

[沖田一志] 最近までGmailを利用してメール確認していた。仕様変更で外部メールの受信が難しくなったのでOutlookに移行。MS365の機能を利用して、今までと同様な使い方ができるようになった。

[磯拓哉] 年末年始は大酒を飲み、年を越した感覚も曖昧なまま新年を迎えたような気がする。肝臓に気をつけてしっかり健康管理することを今年の抱負としたい。

[住友宣夫] 戎祭に行き、周辺の露店を見て回った。人出が多く、少しの時間でも人混みに疲れたが、祭りならではの賑わいを感じれた。

[笹川勝正] 正月休みにゲーセンで太鼓の達人をプレイした際にはりきりすぎて手首を負傷しました。今年一発目の怪我としては何とも悲しいものになりました…

大阪市の住民参加型地域組織「地域活動協議会」の活動に橋を架けよう「近ツ橋【ちかつきょう】」

近ツ橋

北津守校下 第18回成人式

みなさんは成人の日にはどんな思い出があるだろうか。私は友人と「一緒に行こう」と約束をしていたが、2人揃って寝坊し、目が覚めると成人式が終わっていた思い出がある。

さて、1月11日に北津守老人憩いの家で「北津守校下　第18回成人式」が開催されたので、取材へ赴いた。本式典は北津守地活協が主催であり、西成区成人の日の集い終了後に北津守校下の新成人を対象に実施されている。

当日は12名ほどの新成人が参加し、それぞれがスーツや袴、振袖に身を包み、記念の日に相応しい晴れやかな姿だった。

北津守地活協・崎濱会長の祝辞の後、各来賓の祝辞にしっかりと耳を傾けていた。地域の人たちがこうして成人を祝ってくれるのは、参加する人にとっても嬉しいものなのだろう。集合写真を撮影する際も全員が良い顔をしていた。

これからの人生、鬱陶しいことも面白いことも山ほどあると思うが、それら全てを糧にかっこいい大人になってほしい。と、成人式に寝坊した先輩の言葉で締めとしよう。

[谷口円]デジタルリマスター版が公開中の「落下の王国」を鑑賞。圧巻の映像美でした。石岡瑛子さんが手掛けた衣装が素晴らしくトキメク。数年前に東京でやってたらしい回顧展行きたかった…。

[田岡秀朋]60年前の丙午の谷。出生数が50万人近く減った。2025年の出生数は66万人だから、隔世の数字。迷信を吹き飛ばし、「火」を灯す馬年にしたいな。

西成の地域を忙しく走り回る日々を送るおかん。仕事で出会った人びとの生活の一コマをため息まじりにつぶやきます。※本文は関係者各位の許可をとって掲載しています。

おかんのため息

●おかん はぁ…。もう２月やなぁ。

◆息子 年取るたびに時が経つのが早くなるね。

● けどな、“いま”っていうのは待ってくれんから、がんばっていかなあかんぁって言うてるんやけど。

◆ ほぉ、なんかがんばっとるんかいな。

● あるご夫婦のこと。夫の夏雄さんは18年前からの利用者さんで、そのうち妻の君子さんとも話すようになって。いろいろよく喋ってくれる明るくて綺麗な人やったよ。

◆ へぇ。

● けど、韓国からお嫁に来た人やから日本語で苦労してはった。それで悩んで心と身体がしんどくなって、家の中も乱れていって。

◆ そら、気の毒な。

● そこからいろいろあって、大勢の人の協力で引っ越して少し落ち着いたけど、体調がどんどん悪化していって介護が必要になってん。

◆ 辛いなぁ。

● 君子さん、若かったけど、特定疾患やから介護保険に申請したらできる。だから認定を受けることにしたんやけど、君子さんの様子を見てたら、すぐにベッドが要るような状態で。「介護ベッド、すぐ入れますよ」って言うたら、「調査の前にもしものことがあったら請求できませんよ」って注意された。けど、「そんなん言ってられへんから、すぐ入れます」って、もうその日のうちに入れてん。で、次の次の日に君子さんは亡くならはった。

◆ えぇ…。

● 最期は床じゃなく、ベッドで過ごせて良かったと思う。制度上は認められないけどね。

◆ う～ん。なんか複雑やな。

● で、年末に夏雄さんと会うことがあってんけど、君子さんの思い出、いっぱい話してくれはったわ。

◆ へぇ。

● 最期まですごく澄んだきれいな目をしてたって言ってはった。

◆ ふぅん。

● 亡くなる前日、君子さんが「桃の缶詰を食べたい」って言うから食べさせた。でも、体調が悪くなって呼吸困難になるし、苦しくて戻すらしいねんね。夏雄さん、人工呼吸とかもやっていたらしくて、その戻ってきた桃の甘い味が忘れられないみたい。

◆ むむっ…、すごいな、それは…。

●「なんか、すごい汚い話やけども」って言うてはったけど、それだけ愛してはったんやね。

◆ けど、それはすごいなぁ。

● １年経っても「もうこれ以上愛せる人はもう二度と出会えへん。またいずれ天国で会えるやろなぁ」って。

◆ へぇ。一瞬、一瞬でさまざまやなぁ。

● そうやろ。ほんま理解してほしいのは、福祉用具って、“いま”必要やねんね。待ってたら必要じゃなくなるねん。

◆ 奥さんも２日後に亡くなってるわけやからな。

● 福祉用具ってそういう“いま”言うて“いま”すぐ要るもんやねん。だからほんまに動きが早くないとダメ。「待って」が利かへん。

◆ おかんの仕事の肝やな。エエ話聞けた。

● ほんま？

◆ いや、知らんけど…

[福井龍磨]今年練習しようと思っている楽器。ティンホイッスル(アイルランド)、竹塤(中国)、ケーナ(ペルー・ボリビア)、アイリッシュフルート(アイルランド)、インディアンフルート(アメリカ)。全て笛。

[西田吉志]確定申告の季節が到来ですね。山ほどあるレシートを見ていると去年の自分の消費のクセが丸見えに、申告よりも先に反省会が始まります。なんてことはありますか？

葉っぱの吐見（といき）

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。

「レモンリーフの葉っぱ」の巻

なまえにレモンがつくけど
いろはグリーンなわたし
なまえにレモンがつくけど
かおりはノーマルなわたし
なまえにレモンがつくけど
からだはスリムなわたし
なまえにレモンがつくけど
フルーツではないわたし
なまえにレモンがつくけど
ベジタブルではないわたし
なまえにレモンがつくけど
サワーではないわたし
葉っぱのかたち何かにソックリ
なまえにレモンすっきりしたわたし

赤井まゆみ

レモンリーフのこと

ツツジ科の常緑低木。レモンのような形をした葉っぱが特徴。花言葉は「純粋な愛」「永遠の幸福」

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

2026年がスタートしました。あけましておめでとうございます。

今年は年明け早々に、アメリカによるベネズエラへの武力行使が起こり、世界のこれまでの秩序が崩れていく現実を目の当たりにした。日本も中国との関係を抱える中で、こうした国際情勢は決して他人事ではなく、不安定さを増している。

一方、国内では物価高が続き、市民生活は厳しさを増すばかりだ。さらに今年は医療費改革が進められ、実質的な負担増となる可能性も指摘されている。とりわけ年金受給者や高齢の低所得者にとっては、生活が一層苦しくなることだろう。

このような時だからこそ、ゆ～とあいの相談活動をより充実させ、身近な支えとなる役割を改めて考えていきたい。

（寺本良弘）

いい湯かげん

社会保障を選挙の争点に

「湯かげん」は最近政治の話ばかりやねと読者に言われた。話題を広げねばと反省もするが、酒やお茶の「あて」に政治を語るのは「日常」と思ってきたから、今号も一説。

松の内明けて、いよいよ、社会保障と税の一体改革のための超党派で民間有識者を含む「社会保障国民会議」がスタート。高市首相は「給付付き税額控除」も議題に乗せると表明したから、俄然注目した。ところが、突然、2月解散総選挙の報道が飛び込んできて、振り出しに戻った。

昨冬の通常国会で分かったことは、一面では、自民一強が崩れての連立政権で、「103万円の壁」など野党提案の法案も通りやすくなった。もう一面では、やっぱり自民首相連立政権では政策実現に自民内の抵抗が強く、時間がかかり過ぎた。だから、課題は二つ。一つは、野党は共同提案に足並みを揃えて欲しい。二つは、次の選挙で自民を減らして、自民以外の首相を選出する展望を見せて欲しい、そう思っていた。

「給付付き税額控除」とは、中所得者には「減税」、低所得者には「現金給付」ということで、格差を是正しつつ「手取り」を増やす。立憲案では月額4万円となる。生活保護制度は無くすべきではないが、制度的・心理的ハードルが高く、就労意欲を抑制してしまっている。「給付付き税額控除」こそ新しいセーフティネットだと期待できる。もちろん、最低年金保障とか、社会保険料や医療費負担のあり方の見直しとも連動させる必要がある。

このように良い制度なんだが、問題は財源。大企業の法人税や高所得者への所得課税の見直しが必須となり、企業などの抵抗もあるだろう。年末、維新代表の吉村知事が「定数削減」で国会議員の改革への本気度を示せと迫ったが、あまりに唐突で、大ファールとなった。企業や高所得者向けの大向（おおむこう）として、いま言ったら良かったのにと思う。

また、前号で紹介した公明党の「ジャパンファンド」という「（税と無駄の削減に次ぐ）第三の財源」も有意義だ。ただ、年金積立資金が市場に翻弄されないための「新たな公の法体系」が必須。上手くやればファンドも「コモン（共有財）」に化ける。

国民民主は「所得を上げる」、維新は「副首都法」。賛否は別としてわかりやすい。立憲や公明はどうもわかりにくい。ボクは「給付付き税額控除」こそ人権や福祉の「悲願」だと思ってきたから、立憲や公明にはもっと分かりやすいネーミングを考えて総選挙を闘って欲しい。そして、社会保障と人権保障、安全保障をしっかり考える選挙にしたいものだ。

ボクの主訴は、〝貧しくても卑下することなく、豊かになっても奢ることがない〟という人と人の関係を政治にスケッチしたら、今のところ「給付付き税額控除」が一番フィットする。社会保障改革は人権理念を基本に、ということだ。

さて、未だ不明な要素もあるが、どうやら総選挙だ。たとえ高市内閣を変えられなくても、高市首相の右寄り（人権の後退）を止めることは可能で、現実的だ。要は、自民党を増やさない、限りなく減らすことだ。

冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司]30年前に出版された文芸時評が皮肉やユーモアたっぷりで愉快。創作時の心や体の動きまでも捉えてしまう（本当のところはどうだか不明だけども）、その一流の筆致に感銘。

[山村裕太]先日パソコンが欲しかったのでMacBook Airを購入。ずっとWindowsだったので操作が慣れませんが、とりあえずこれ見よがしにスタバへ持って行って意識高い感じを演出しようと思います。

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

ある老夫婦の話です。幸せに暮らしていた大切な一人娘には、小学2年生と4歳の女の子がいました。時折、老夫婦のところに来ていたので、私も面識がありました。先月のお参りで何気なく女の子たちを見ると、お揃いのペンダント。そこにあったのは母親の写真でした。

「この子たちのお母さんが死んだのよ」と、泣きながらつぶやく老婦人。寒い朝、ご飯を作っている時に心筋梗塞で倒れたそうです。姉の首には家の鍵も掛けられていました。葬儀から幾日も経っておらず、これからが大変に違いありません。

日常では「お変わりありませんか?」と挨拶することがあります。よくよく考えてみると、諸行無常の世界に生きる私たちは、日々刻々と変わって行く存在なので、必ず、「変わり」あります。「変わりありません」と返事できるのは、この老夫婦や孫娘のことを思いますと、とても有難いことなのでしょう。

かつて、老僧から「平凡が一番」と教わりましたが、年を重ねるにつれその有難さを実感するようになってきました。

松向寺　通法

写真は人生の一部が映ったもの。ここは思い出や自慢の1枚を少しご紹介するコーナーです。

ワタシの1枚

『連休最終日』

三ヵ日には多くの参拝客で賑わった住吉大社も、正月連休の最終日には人出が落ち着き、境内には穏やかな空気が流れていた。静かな参道を歩く人々を見て、楽しかった正月を思い出しながら、少しずつ日常が戻ってくるのを感じ、明日からの仕事へと気持ちを切り替える日となった。

（編集スタッフ 住友宜夫）

ゆ〜とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび2月号（vol.228）
発行日：2026年2月1日（創刊日：2007年1月1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋3-6-33
電話：06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長：西田吉志
編集：磯拓哉、沖田一志、笹川勝正、住友宜夫、田岡秀朋、福井龍磨、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki、西井亜花梨
デザイン：谷口円

（株）ナイス
ホームページ